

### 第3 問題作成部会の見解

## 地 理 A

### 1 問題作成の方針

平成29年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、平成21年3月に改訂された高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に基づく2回目の入試に当たる。新しい学習指導要領による初めての出題であった前年度問題の反省を踏まえ、大問の構成や問題内容について慎重に検討した上で、以下のような方針で作問を行った。

#### (1) 高等学校学習指導要領への対応

学習指導要領の「地理A」における目標は、「現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培う」ことにある。この目標の基本的な趣旨を問題作成の方針とした。

#### (2) 出題内容と出題地域

現代世界の特色や課題に関わる地理的事象を、多面的、多角的に幅広く取り上げた。大問レベルでは、世界諸地域の事例地域として「ラテンアメリカ」を取り上げ、生活圏の地理的な諸課題と地域調査の対象地域として「壱岐島（長崎県壱岐市）」を取り上げた。小問レベルでは、現代世界の特色や諸課題について、主題的な方法から考えられるような形式を取り入れ、身近な生活圏から世界各地の問題を万遍なく出題した。

#### (3) 出題構成

学習指導要領の趣旨及び教科書の学習内容に準拠し、「第1問 地理の基礎的事項及び日本の自然環境と災害」、「第2問 世界の生活・文化」、「第3問 ラテンアメリカ」、「第4問 地球的課題」、「第5問 壱岐島（長崎県壱岐市）の地域調査」という構成とした。

#### (4) 出題内容の工夫

学習指導要領の目標や内容を踏まえた問題作成を行った。作業的、体験的な学習を通して地理的技能を身に付けられるように、主題図、統計、写真などの各種資料を活用しつつ、地理的に考察することを重点に置いた出題に努めた。

#### (5) 大問の設問構成

昨年度と同様、大問数は5題、小問数は34問とした。「地理B」との共通問題である「地理的技能と地域調査」に関わる大問を、今年度も第5問として配置した。昨年度は「日本の自然環境と防災」に関わる設問を大問として出題したが、今年度は第1問に日本における自然災害や防災に関わる小問を含めた。全体として、文章の正誤問題、選択問題、組合せ問題をバランス良く配置し、さらに地図・主題図、グラフ・表、及び写真を用いた多様な形式の問題を出題し、地理的技能や地理的な見方や考え方を踏まえた思考力や判断力を総合的に問うことができる設問構成とした。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 この大問は二つの中間から構成されており、中間A：地理の基礎的事項では学習指導要領「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察」に準拠し、世界観の拡大と世界の多様性について出題した。中間B：日本の自然環境と災害では、学習指導要領「(2)生活圏の諸課題の地理的考察」における「イ：自然環境と防災」に準拠し、自然災害に関する基礎的知識を問うた。問

1は中世の世界観、問2は拡大した世界を表現する図法に関する設問である。問1で用いた図は教科書に掲載されているが、正答率は予想外に低かった。問3は世界の多様性について自然と人間活動の両面から設問し、正答率は高かった。問4は、地球環境問題とも関わる地形と人口の分布に関する総合的知識を問う問題である。問5は、乾燥地域の自然と人間活動について問うた。問6は、水害を通して人間と自然の関わりを問うた。問7は、災害後の状況から災害を判定する設問である。4枚の景観写真から自然災害の種類を考えさせる新しい形式であるが、正答率はとくに高かった。問8は、地形的特徴から土地の性質を読み取り、災害を想定する力を問うた。第1問全体の平均得点率は標準的であり、正答率の著しく低い小問はなく、難易度がよく調整されていたといえる。

第2問 学習指導要領の「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察」の「イ 世界の生活・文化の多様性」に関する大問である。「世界を広く大観する学習と事例地域を通して考察する学習を組み合わせて扱うこと」を念頭に、現代世界が抱える様々な課題を理解させるために、とりわけ、生活・文化の観点から各設問を作成した。各小問の正答率は5～8割で、難易度のバランスが取れていた。問1では、主要な宗教の世界的分布に関する基礎的知識をベースに、世界遺産にも登録されている特徴的な宗教建築物についての基礎的な知識を出題した。問2では、文化の主要概念である民族や言語に関する基礎的な知識を問う。問3では、グローバル化の進展が文化に及ぼす影響について、特に、食、音楽、衣服、アニメーションを選択肢として考えさせた。問4では、主要作物である米、トウモロコシ、肉・魚の消費地域について考えさせ、代表的な「主食」について問うことを主眼とした。問5では、特徴的な気候と農産物について、その地域的差異に関する設問とした。問6では、経済的豊かさを反映する1人1日当たりの食料供給量とともに牛乳・乳製品の消費割合を問うことで、食文化の視点から各国の農牧業、経済を考えさせた。

第3問 学習指導要領「地理A」の目標には「現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し（後略）」と書かれている。本大問では中南米を例に出題した。各問の作成に際しては「海岸付近の地形」「気候」を自然的背景として、「15世紀の大航海時代」「食文化」を歴史的背景として、「農作物の栽培」「社会・経済」「観光産業」を現代社会における諸課題に関する問題として作成した。大問全体としては時系列的に大航海時代から現代に近づくように問いを配置してある。「食文化」「観光産業」に関する問いでは日常生活との関連も意識した。受験者に直接的に知識を問うことは極力避け、地図や各種統計データなどを活用し、中南米地域の地域特性を考察させる作問を心掛けた。一方、各社教科書の本文では、ブラジルを中心として説明がなされているが偏向しない出題を心掛けた。大問の得点率は5割を少し上回った。問2、問3、問6の正答率がやや低く、一方で問7の正答率が相対的に高いなど、やや正答率にばらつきが見られたが、全体としてバランスの良い設問であった。

第4問 学習指導要領の「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察」の「地球的課題の地理的考察」について作問した。まず、地球的及び地域的視野から社会経済環境を左右する人口に関する問題を考察すべく、問1で世界の4地域の人口の推移について、問2で少子化という社会問題への取り組みについて、国別・地域別の違いを問うた。次に、人口爆発という点からアフリカの食料問題についての理解度を問3で問い、さらにエネルギー問題についての理解度を問4で問うた。また、飢餓と飽食という点から世界の食料問題について問5で問うた。その後、環境問題という点から世界の森林減少について問5で問い、最後に環境問題への取り組みとして環境先進国であるドイツにおける都市政策について問6で問うた。大問全体の平均点はやや低かった。

第5問 学習指導要領における「地理A」の内容「生活圏の諸課題の地理的考察」のうち「生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に準拠し、離島としての特徴を有する長崎県壱岐島を対象地域として選び、地理的思考や地理的技能を多角的に測る問題を作成した。問1・問2では地形や地域変化に関する地勢図・地形図の読図能力、問3では写真と地形図とを対照する能力を問うた。問4～6では基礎的な知識や模式図・統計・主題図の読解力を当該地域に即して問うた。問7では自然災害と防災に関連する調査法を当該地域に即して問うた。結果を見ると、大問全体の得点率は比較的高く予想どおりであった。小問ごとにみると、問1がかなり高く、問2がやや低くなったほかは、標準的～やや高め得点率となった。本問は「地理A」「地理B」の共通問題だが、特に「地理A」受験者にとって不利になったとの評価はみられなかった。なお、地域的な有利・不利の差はなかったと判断された。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 地理の基礎的事項については幅広い範囲から出題されており、自然災害に関しては災害の影響と人間生活について、写真や地図から幅広く考察させる設問との評価を受けた。一方で、作図に関する工夫が不足しているとの意見もあった。問1は、標準的な良問と評価された。問2は、メルカトル図法に関する基本的な設問であり、選択肢文章の表現に関する指摘があった。問3は植生と人間活動について問う平易な良問と評価された。問4は良問と評価されたが、正答以外の地域の判定が難解との指摘もある。問5は乾燥地域に関する基礎的事項を問う標準的な設問と評価された。問6は水害に関する対応、対策に関する設問であり、伝統的な取り組みを取り上げた点は評価を頂いた。問7は、適切な写真を使った平易な良問という評価を受けた。問8は、旧版地形図の利用価値を示した良問という評価であったが、旧版地形図の図式の説明が必要だったかもしれない。災害に関する問6、8の正答率が低かったが、教科書の記述が不十分で、かつ被害規模は確率的事象であることなどの理由から、断定的な作問が難しい側面もあった。自然災害に関する設問は教育現場で関心が高いため、今後も思考力を高める作問を検討していきたい。

第2問 総評としては、平易な問題が多い一方で、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢がうかがえるというコメントを得た。問1は、世界遺産の宗教建築物の写真を取り上げたものであり、平易であるとの評価を得た。問2は、多民族国家としてインドネシアを扱うことは少なく、難易度が高いとの指摘があったものの、民族や言語に関する基本的な問いであり、おおむね標準的であろう。問3は、選択肢の文章表現に工夫が求められるとのコメントを得たが、「地理A」の特性を考えた出題であるとの評価を得た。問4の難易度は標準的との評価であった。問5は基本的な知識を問いながらも、良問という評価であった。問6の難易度も標準的との評価であった。以上のことから、基本的に教科書に準拠した標準的な内容の問題であったと判断しているが、問い方や難易度についてはより一層精査する必要がある。

第3問 全体的にオーソドックスで標準的な難易度との評価を受けた。問1は、おおむね標準的な問いとの評価であった。問2は、雨温図から判断する基本的な問いであった。問3ではラテンアメリカの人口構成を問うたが、知識偏重との指摘もあった。ただし、知識がなくても各国の位置を地図で見て、旧宗主国の進出ルートやサトウキビ農園など植民地経営の状況から推論して解くという、地理的技能を使った解法もあるかと思われる。問4は、写真が白黒であることから食材を判断することが困難との指摘があった。問5は、近年の大豆生産の拡大という背景を問うことが趣旨であり、その意図が伝わった評価もいただいた。問6は、ラテンアメリカ地域全体を対象とした文章正誤選択問題で、誤文が明白すぎ改善の余地はあるが、出題内容は

適切であった。団体によって難易度の評価が分かれた。問7は、図を読み取って背景を考察する良問との評価が多かった。

第4問 昨年度は大きく2つの分野に分けて出題された大問であるが、今年度は1つに絞り小問数を減らして出題した。全体として、単文の正誤、グラフ、表、地図の読解などバランスが取れた出題となったという好意的な評価を賜うことができた。さらに、問2と問4、問6については良問と、問5は「好感が持てる」との評価をいただき、作問はおおむね成功したものと喜びたい。ただし、問3の正誤問題については、肢文の作りが安易であるという意見や常識的であるという意見があり、今後、正誤問題を作成する上での肢文の完成度を上げる必要があると考えられる。具体的には、正誤問題においても標準的な難易度での地理的な思考・判断力を問う良問を目指すべきであり、今後の課題としたい。最後に、「地球的課題の地理的考察」については例年難問が多いと指摘される範囲であるが、今年度は難易度が標準的との評価をいただいたので、今後もこの点に注意を払いたいと考えている。

第5問 全体としては、従来傾向を踏襲した問題構成、また良い出来栄えといった評価を受けた。おおむね出題の意図が受験者にも評価者にも理解されたものとする。問1は地勢図が読み取りにくいとの評を受けたが、それもあって明白な内容を問うことにしたもので、ごく平易という別の評価はそれを反映している。問2は、適切、難問という相反する評をみるとともに、旧版地形図の地図記号を読み取らせるのは適切でないという意見があった。読図問題としての適切な水準、また旧版地形図の扱いについて、今後も検討したい。また問3についても適切、難問と評価が割れたが、土地利用だけでなく地形を把握すれば解答を導き出すのは難しくはなく、得点率を見れば適切な問題であったと考える。問4には工夫された問、良問との評があった。問5は質が高いという評と工夫がないとの評に分かれたが、これは統計の読み取りが易しかったことに起因しよう。問6・問7については良問という評価を受けた。今後も、受験者の学習内容を正確に把握し、地域的な有利を可能な限り避けながら、新たな出題形式を試みるなど、適切な地域調査問題を追求していく必要がある。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 「地理A」の学習内容に沿った出題となっており、地図・主題図、図表、写真が多く用いられ、全般的に地理的な見方や考え方及び地理的技能を活用させる問題がバランス良く配置されている点について評価された。その一方で、学習内容に比して詳細な知識が求められる設問や読み取りが難しい図表などが取り上げられている設問がみられるといった指摘もなされた。高等教育への影響を鑑み、今後の作問で留意する必要がある。
- (2) 難易度については、平均点は57.08点で、昨年度と比較して4.94点上昇し、センター試験の目標である60点に近づいた。「地理B」の平均点との比較では、「地理A」の方が5.26点低かったが、昨年度より差は縮まった。「世界史A」や「日本史A」との難易度調整にも配慮しつつ、引き続き適正な難易度の作問を目指したい。
- (3) 地図・主題図の活用については、おおむね評価された一方、地形図の未更新問題への対応や、地理情報システム(GIS)など新しい地図技術の進展に伴う幅広い地理的技能の習得を意識した地図分野の出題が求められており、今後の検討課題としたい。
- (4) 全体として、外部評価委員会・団体等からは学習指導要領の趣旨に沿った作問であるとの評価を受けた。今後も、作業的、体験的な学習を通じて地理的な技能や思考力・判断力を養うことを重視する「地理A」の内容に即した作問を継続していきたい。

## 地 理 B

### 1 問題作成の方針

平成29年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、平成21年3月に改訂された高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に基づく2回目の入試にあたる。新しい学習指導要領による初めての出題であった前年度問題の反省を踏まえ、大問の構成や問題内容について慎重に検討した上で、以下のような方針で作問を行った。

#### (1) 学習指導要領への対応

学習指導要領の「地理B」における目標は、「現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培うことにある。この目標の基本的な趣旨を問題作成の方針とした。

#### (2) 出題内容と出題地域

世界の地理的事象を主な対象として、高等学校で学習する現代世界の地理的認識に関わる地理的事象を、多面的・多角的に幅広く取り上げた。大問レベルでは、地誌的な考察地域として「中国」及び「スペインとドイツ」を、生活圏の地域的特色を捉える地理的技能を身に付けさせるため、身近な地域として「壱岐島（長崎県壱岐市）」を取り上げた。小問レベルでは、日本を含めた世界の諸地域から万遍なく出題し、出題内容と出題地域ともに偏りのない出題を心掛けた。

#### (3) 出題構成

学習指導要領の趣旨及び教科書の学習内容に準拠し、「第1問 世界の自然環境と自然災害」、「第2問 資源と産業」、「第3問 都市・村落と生活文化」、「第4問 中国の地誌」、「第5問 スペインとドイツの比較地誌」、「第6問 壱岐島（長崎県壱岐市）の地域調査」という構成とした。

#### (4) 出題内容の工夫

学習指導要領に沿って、「地理B」で扱う基本的な学習内容を出題するように努めた。地理の特色である地図や主題図を活用し、グラフや表、写真（画像）の読み取りも含め、出題内容や問いかけ方において、多様な出題形式を心掛けた。同時に、世界の地理的事象に関する基礎的な知識だけでなく、歴史的な背景を含めた地誌的な考察や地理的な見方や考え方に基づいた、現代世界の地理的認識とその背景に関する地理的な思考力や判断力を問うように工夫した。

#### (5) 大問の設問構成

昨年度と同様、大問数は6題、小問数は35問とした。「地理A」との共通問題である「地理的技能と地域調査」に関わる大問を、今年度も第6問として配置した。また、昨年度に引き続き、類似性もしくは対照性をもつ二つの地域を比較する「比較地誌」を第5問で出題した。全体として、文章の正誤問題、選択問題、組合せ問題をバランス良く配置し、さらに地図・主題図、グラフ・表、及び写真（画像）を用いた多様な形式の問題を出題し、地理的技能や地理的な見方や考え方を総合的に培う設問構成とした。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 学習指導要領の「世界の自然環境と自然災害」に関する箇所について問うた。問1は、近年、とりわけ注目されている地震活動や火山の分布との関係が深い海溝の分布の知識を問うた。問2は北極海周辺における暖流・寒流の状況について、「海が氷で覆われやすい地域」という観点から理解度を問うた。問3は、緯度のほぼ同じ複数地点を取り上げることにより、大

陸の東海岸、西岸、内海（地中海）などの地理的位置の違いにより、どのように気候が変化するかという点についての理解度を問うた。問4は、ベネツィア（ベネチア）周辺を事例に、河川と海の営力によって形成される地形の形態・名称を理解しているかを問うた。問5は、地域規模で自然災害の発生件数・被害額・被災者数の割合を問うことによって、各地域の自然環境及び社会状況を理解しているかを問うた。問6は、ハザードマップの読図に関する問いである。ハザードマップは、過去の災害事例などから作成されるため、実際の災害は地図に示された範囲に収まらない可能性があること、発生する現象の性質に応じてリスクを予想することを理解しておく必要がある。大問全体の得点率は平均よりやや高く、問5の正答率は8割を超えた。一方で、問2、問4、問6については平均点を下回った。これは、受験者の地形の読み方に対する理解不足、ハザードマップの読み取りに慣れていないことに起因すると考えられる。

第2問 学習指導要領の「資源、産業」に対応するテーマとした大問であり、日本及び世界の「農業」「流通」「資源・エネルギー」「工業」について体系的に問うた。問1は日本の農業とそれに関する事柄について問う設問である。問2は世界の農業の地域差について問う設問である。問3はバイオマスエネルギーの特徴と問題について問う設問である。問4は4か国のエネルギー輸出入量と工業との関係について問う設問である。問5は世界の石炭資源の分布と石炭産業の地域差について問う設問であり、正答率は約9割に達し易問となった。問6は代表的な工業地域の成立過程について問う設問である。地理Bの学習実態に即し、資源や産業の世界的な分布や動向に力点を置きつつ、具体的な品目を問う際にも学習頻度が高いものを取り上げるよう配慮を行った。

第3問 学習指導要領の「世界の人口、都市・村落に関する諸事象を取り上げ、それらの分布や動向などについて考察させるとともに、現代世界の人口、居住・都市問題を大観させる」という方針に沿い、世界の都市景観や都市への人口集中、都市・村落の成り立ち、日本の人口に関連する問題を取り上げ、主題図や統計を用いて問うことで受験者の主体的な作業・学習の到達度を測ることを目指した。また、高齢化や介護供給について大都市圏と非大都市圏を比較する視点を取り入れ、現代的な課題と地理的思考との接合につなげられるよう意図した。大問全体の得点率は標準的で、小問の正答率は問4で低く問5では高いという特徴がみられたが、全体としては成績上位層と下位層とで得点差が生じ識別力は高かった。

第4問 学習指導要領の「(3)現代世界の地誌的考察」における「イ：現代世界の諸地域」に準拠し、地誌の考察方法とされる「地域の多様な事象を項目ごとに整理して考察する」及び「地域の特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察する」ことを踏まえて出題した。その上で、中国の地域性について、自然環境と人間活動との関係を意識して作問した。「地理B」で地域性を捉えるためには、自然環境と人間活動との相互作用に対する知識・理解が重要であるためである。中国における経済活動と環境問題に注目しつつ、関連する事象を幅広く扱うよう心掛けた。大問全体の得点率からみると難易度は適切であった。はじめに、中国全域にわたる自然環境の理解を問うため、気候環境と深い関わりのある特徴的な地形（問1）、地域ごとの緯度や海からの距離による気候特性（問2）に関する設問とし、多くの写真や図を用いた。問2については成績中上位者の正答率が低かった。続いて、気候さらには沿海部の都市化と関連した農作物の生産（問3）、経済成長の結果問題となっている硫黄酸化物による大気汚染（問4）を取り上げた。さらに、国内の地域格差（問5）や、少数民族に関する現状や問題（問6）について問うた。

第5問 学習指導要領の「(3)現代世界の地誌的考察」の中でも、「対照的又は類似的な性格の二つの地域を比較して考察する地誌」を踏まえ2国間の比較地誌に関する問題を作成した。ヨ-

ロップの中で同程度の面積を持ち、農業や貿易、都市人口やその分布において比較にふさわしい対照性・類似性がみられるスペインとドイツを取り上げ、比較によってみえる両国の特徴を捉える問いとした。構成としては、自然環境と農業、都市システムの観点からみる空間構造、貿易からみる経済的特徴、移民や国際観光からみる特徴を問うている。大問全体の得点率はやや低いが、それは問1と問3の正答率が低かったことによるもので、全体として上位層と下位層との得点差が生じ、識別力は保持されている。

第6問 学習指導要領における「様々な地図と地理的技能」のうち「地図の活用と地域調査」に準拠し、離島としての特徴を有する長崎県壱岐島を対象地域として選び、地理的思考や地理的技能を多角的に測る問題を作成した。問1・問2では地形や地域変化に関する地勢図・地形図の読図能力、問3では写真と地形図とを対照する能力を問うた。問4～6では基礎的な知識や模式図・統計・主題図の読解力を当該地域に即して問うた。問7では自然災害と防災に関連する調査法を当該地域に即して問うた。結果を見ると、大問全体の得点率は比較的高くなり、これは予想通りであった。小問ごとでは、問1がかなり高く、問2がやや低くなったほかは、標準的～やや高め得点率となった。なお、地域的な有利・不利の差はごく小さかったものと判断される。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 地形や気候の基礎知識と合わせ、図表を読み取った結果を組み合わせて思考する適切な良問が多く、また、自然災害についての問いは継続的な出題を望む意見をいただいた。問1の海底地形は過去問では見慣れないが、日本列島の太平洋側に海溝があることを理解していれば解答可能で、良問との評価を受けた。問2は海流の基礎理解について海水を素材として問う良問との評価を受けた。問3については、世界の気候を捉える上で適切な地点を選定した良問との評価を受けた。問4は実際の地形から海岸地形を問う点が良いとの評価を得たが、やや知識問題であるとの意見もあった。問5は各大陸の人口や経済状況などを理解できていなければ解けない問いであり、地理的思考力を問う優れた出題であるとの評を得た。問6はハザードマップに対する啓発性のある良問との評価を受けた。

第2問 本大問に対して、出題形式や出題内容、地域などのバランスが考慮されている、最近の動向も押さえているかを問う工夫された設問、との評価を受けた。問1は教科書の記述に沿った基本的事項を問う問題との評価を受けたが、遺伝子組み換え作物を使用した加工食品が全く輸入されていないのか、堅牢性への疑念も寄せられた。問2は典型的な読解のステップを踏んで解答できる適切な出題との評価を受けた。問3は誤文が巧妙との評価であった、誤文に惑わされた受験者も多かったと思われる。問4は基礎的な知識と読解を組み合わせた良問との評価を受けた。問5は定番の形式との評価であった。問6は都市レベルの出題であるが基本的な内容であるとの評価を受けた。正答率も相対的に高く、適切な難易度であったと思われる。大問全体としては平均的な正答率であったが、小問間で難易度のばらつきが見られたので、今後の検討課題としたい。

第3問 形式・内容、大問全体の構成ともにバランスが良く、地理的な思考力を必要とする問いが複数みられ、全体として高い評価を得た。小問別にみると、写真を用いた問1や階級区分図を用いた問5では、図・写真から深く考えさせる工夫があれば一層効果的であると指摘され、今後検討したい。問2は大問全体のバランスをとると同時に都市の歴史的観点も絡めた良問と評された。散布図を用いた問3については、指標の意味を正確に理解することが難しいという意見がある一方で、適切な関係の2変数であり問われた国も適切で良問との評価があり、成績

上位層と下位層との識別率も高かった。問4は読み取り技能を問う良問との評価のほか、地理総合の学習内容の柱の一つであるGISを念頭に置いた作業学習にもつながるとの意見があった。今後も難易度に配慮しながらこうした出題を継続したい。

第4問 地誌の大問として、自然環境、産業、社会問題がバランス良く、幅広く出題されたことが評価された。その一方で、細かい知識を問われる小問があったとの指摘もあった。問1は、特徴的な地形についての知識・理解を問う標準的な出題とされた。問2は、特徴的な気候についての知識・理解を問う標準的な出題とされ、標高・隔海度・風系から総合的な判断が必要になること、地名でなく地図上の位置で示し地理的思考力を問うた点などが、良問と評された。問3は農業分布に関する標準的な出題だが、地形、気候、都市の分布などから判断させる、思考力を問う良問と評された。問4は大気汚染物質の排出源や拡散する自然現象を組み合わせしており、時事性を踏まえた良問と評されたが、誤文正答の作り方がやや安直と指摘されたので今後の課題としたい。問5の経済格差に関する問題、問6の少数民族に関する問題については、解答を導く上で詳細な知識が必要との指摘もあったが、出題範囲としては適切であった。

第5問 全体としては、図表、分布図、統計資料などを用い多面的に地理的事象を読み取らせる形式や内容の工夫に高い評価が寄せられた一方で、難易度の高さ、類似点を問う必要性が指摘された。小問別にみると、特に問1や問3で難易度の高さに指摘がある一方で、問1は、自然環境の理解を踏まえた地理的思考力を試す良問として、問3は両国の特徴をよく示す図と視点の面白さも指摘され、評価が分かれた。問2や問4、問5では、基礎的な知識や読解力、過去の出題を踏まえた受験者の学習成果を測る問題との評価があった。本問では、しばしば指摘される出題形式の既視感を脱し思考力を問うために、受験者の学習内容や知識から類推可能な指標や形式を検討・採用した。今後も、専門的な視点と受験者の学習内容とを相互に確認し難易度を調整しながら、問題として洗練させていく必要がある。

第6問 全体としては、従来傾向を踏襲した問題構成、また良い出来栄えといった評価を受けた。おおむね出題の意図が受験者にも評価者にも理解されたものとする。問1は地勢図が読み取りにくいとの評を受けたが、それもあって分かりやすい内容を問うことにしたもので、ごく平易という別の評価はそれを反映している。問2は、適切、難問という相反する評をみるとともに、旧版地形図の地図記号を読み取らせるのは適切でないという意見があった。読図問題としての適切な水準、また旧版地形図の扱いについて、今後も検討したい。また問3についても適切、難問と評価が割れたが、土地利用だけでなく地形を把握すれば解答を導き出すのは難しくはなく、得点率を見れば適切な問題であったと考える。問4には工夫された問い、良問との評があった。問5は質が高いという評と工夫がないとの評に分かれたが、これは統計の読み取りが易しかったことに起因しよう。問6は良問という評価を受けた。問7については、良問、また、選択肢の内容が常識的ではなく地理の特性が表れているといった好意的な評価を得た。今後も、受験者の学習内容を正確に把握し、地域的な有利を可能な限り避けながら、新たな出題形式を試みるなど、適切な地域調査問題を追求していく必要がある。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 「地理B」の学習指導要領の目標と内容に沿っており、分野の偏りがなく、地図、図表、統計資料、写真などの読み取りを通じて地理的な見方や考え方及び地理的技能を問う内容がバランスよく配置されている点について評価されている。その一方で、理解に時間がかかる図表があり、細かい知識や深い理解を必要とする難解な小問がみられるという指摘もあった。高等教育への影響を鑑みて、学習範囲に配慮しつつ適切な問い方になるように今後の作問で更に努めていく



- い。
- (2) 難易度については、平均点は62.34点で、昨年度と比べて2.24点上昇したが、センター試験の水準として適正であったと考える。ただし、「世界史B」の平均点に比べると3.1点下回り、「日本史B」より3.05点上回った。また「地理B」は標準偏差が小さく、高得点を得にくいとの指摘もあり、今後も「世界史B」や「日本史B」との難易度調整にも配慮しつつ、引き続き適正な難易度の作問を目指したい。
  - (3) 問題の形式及び表現についてはおおむね高評価であった。表現については、本来カラーである地形図・地勢図をグレースケールで表示することによるデメリットについて今年度も指摘があり、地図を用いた作問に当たって、今後も継続して検討を行っていく必要がある。
  - (4) 新学習指導要領のキーワードの一つである「災害」、「防災」を扱った小問、並びに「比較地誌」の大問については、改善する余地は残されているものの、おおむね学習指導要領に沿った出題として評価された。
  - (5) 全体として、外部評価委員会・団体等からは学習指導要領の趣旨に沿った作問であり、高等学校での学習範囲に沿って、地理の基本的な知識を問う問題から、地理的な見方・考え方及び地理的技能を基にした考察力や思考力を必要とする問題まで幅広く包含したバランスのとれた問題と評価されたと考えている。今後も、高校現場や受験者の実情について考慮しつつ、地理的な思考力や判断力を念頭に置いた現代世界の地理的認識について適切に問うことができる問題作成を行っていきたい。